

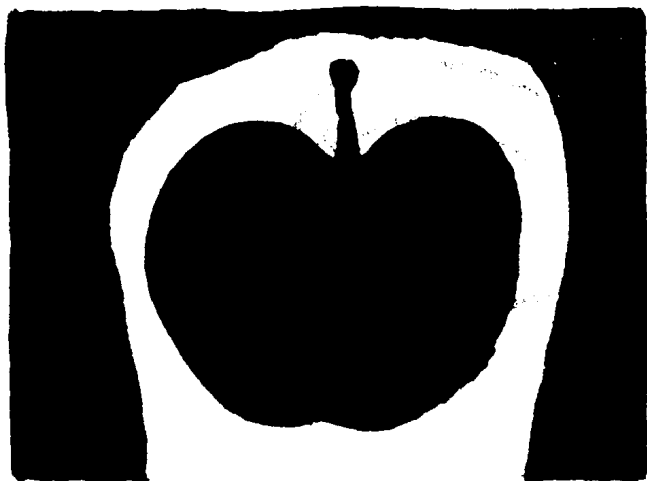
# 子供の秘密

阿部 昭



# 子供の秘密

阿部 昭



河出書房新社

# 子供の秘密

昭和五十一年三月十五日 初版印刷

昭和五十一年三月二十日 初版発行

著者 阿部 昭

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二 電話二九二一三七一一

印刷 文弘社

製本 小泉製本

© 1976 AKIRA ABE

定価はカバー・帯に表示してあります。

子供の秘密 目次

第一部

記憶以前 11

わが小田急 16

冬の遊び 20

一日のごとし 23

三十年の入口 27

私の処女作 32

本のゆくえ 34

子供の秘密 37

やみよのカッパ 41

三蔵法師の馬 46

学校の音 50

海辺の犯罪 53

二宮金次郎の行方 56

親子問答 60

スポーツ雑感 64

知らない場所 68

檜の木のテーブル 72

幻の観艦式 75

コルネット余談 80

風光明媚 86

箱根号の謎 91

安田謙一郎 95

## 第二部

小説は書き直せるか 105

“小さなもの”の作者 109

膺の首飾り 114

チェーホフの星 120

よい文章 125

土地の感覚 131

小説と年齢 135

『行人』を読む 140

志賀直哉全集によせて 154

真剣な遊戯 156

詩人の母 160

『ゆきてかへらぬ』 164

太宰の読者 168

『台所太平記』 171

『雀の卵 その他』 173

安岡章太郎全集 183

『暗い波濤』通読 188

『私のソロモン紀行・私記キスカ撤退』

206

江藤淳再読

213

文藝時評 昭和四十九年一月号—六月号

223

掲載誌・紙一覧

272



装幀

大沢昌助

# 子供の秘密



# 第一部



## 記憶以前

世の中には、自分が産湯につかっている光景さえ記憶していると主張する人もいるらしいが、それは超能力者というものである。私などは自分が記憶の当てにならなき加減を痛感しているから、他人のそれも信用しない。もっとも、記憶なんていうのは本来八割方が創作であると心得ておけば、それはそれで結構愉しめるゲームではあるが。

産湯はともかく、自分が生まれてきた瞬間を覚えている人間には会ったことがない。この眼で見たわけでもないくせに、生まれたと称しているにすぎない。親の証言を信用しなければ、こちらの身元も怪しくなるといふ心ぼそい話で、私もそれを逆手に取って、息子三人を三人とも、近くの橋の下で拾ってきたのだと言いつきながら育てた。しかし、現在では誰もそれを信じている気配はない。

さて、この私は今から四十年前、昭和九年九月二十二日の真夜中に生まれてきたのだそうであるが、場所は広島市中の官舎であったという。広島は海軍の軍人だった父の任地で、軍人の

子供というのは、たいがい両親の流浪の産物ということになっているらしい。それで母は、私  
が子供の時分からよく言ったものである。私を産んだ年はなにしろ例年にない暑さで、この私  
をお腹なはに入れて一と夏を越さなければならなかったのだから難儀だった、と。今日のように冷  
房設備がととのっているわけでもなし、産褥の母はその夏じゅう、悪名高い瀬戸内海の夕風に  
苦しめられたのであろう。産後の母と赤ん坊の私のかたわらでは、せいぜい旧式な扇風機の羽  
根が、なまぬるい空気を悠長にかき回していたのでもあろう。さぞかし大儀であつたらうと思  
うぐらいで、例の桐の小函に入った躰の緒なるものを手にとってじっと眺めてみても、それ以  
上のことが分るものでもない。「私が盛大に泣きわめきながらこの世にもがき出たその瞬間、  
瀬戸内の残暑の熱気が顔を打った」というぐあいには書けないのは残念である。だが、たぶんそ  
のせいで私は夏が好きだ。

おまけに、母が私を生み落とそうとしていたまさにその晩、関西一円を室戸台風なる歴史に  
残る大暴風雨が通過したのだそう、台風の接近とともに産気づいて、というのが、これまた  
母の口ぐせであった。記録によれば、風速六十メートルで、風速計をこわした上、大阪天王寺  
の五重塔を倒し、東海道線の急行列車を転覆させたほどの大物であつたらしい。とても私など  
の及びもつかぬやつだったようで、わざわざそんな晩を選んで出て来ようとしたのなら、いま  
ごろは暴力団の親玉にでもなっていなければならぬところだ。しかし、これもたぶんそのせ  
いで私は台風というのが嫌いではない。

広島と私との因縁は、そこで生まれたという以上のものではなく、以後三十数年、訪れたこともなかった。ただ履歴書などで出生地を問われるたびに、習慣的に広島生まれと書いてきたが、先年、広島方面へ遊びに行った機会に、自分が生まれたという市内の一角を車で通りかかった。同乗している土地の人に教えられて、私は見知らぬ夜の街に目を凝らしたが、暗がりにか白いビルが沈んでいるばかりで、母の胎内もかくやと思われた。

戸棚の奥に押し込んである古いアルバムを引っ張り出してみると、私のこの世における最初の写真は、昭和十年一月七日、すなわち生後百七日目に広島町の写真師が撮ったと覚しい、型通りの楕円形に焼付けた一枚であるとわかる。それは薄赤く着色すれば蜻蛉に最も似ていると言われそうな、おそろしく無愛想な面相のもので、とても自分の顔とは思われない。カメラをひどく意識しているように見えるが、勿論そう見えるだけのことであろう。そして、つぎのページに貼ってあるのが、昭和十一年八月二十三日、満一年と十一ヶ月の時の素人写真らしいスナップである。夏の夕刻、湯上がりと見えて早々と浴衣の寝巻を着せられ、シッカロールで顔を真っ白にして、乳母車の中からこちらを覗き込むようにしている。うしろに白ペンキ塗りの木の小門が見えるから、これは鶴沼海岸くげぬまの以前の家だとわかり、自分のいる場所も見当がつく。この時までには父は海軍省に転勤になり、私は広島から汽車に揺られて運ばれてきたのである。記憶不信を言い立てながら、こんなことを持ち出すのは具合が悪いが、私はその写真を撮られた時のことだけはボンヤリと記憶にある。ある、というより、あるような気がしてならない、



と言ふべきかもしれないが。

しかし、それはただその場面の漠たる記憶でしかなく、前後のことは何ひとつ思い出せない。おそらくその写真の場合は、それが出来上がってきたのを見せられたために、ことさらに私の記憶にとどまることになったのであろう。これなどは例外中の例外で、幼時の記憶の多くは、自分では覚えていゝるような気がするだけで、実は大人たちの思い出話等から復元して、その氣になつてゐるものが多いのだらう。話を聞かされても露ほども覚えていない事柄はいくらでもある。同じ頃、旅行中に汽車の中で向かい側の座席に坐り合わせた見知らぬ紳士が、私がお行儀がよいのに感心して、御褒美だといつて羊羹をナイフで切つて分けてくれたことがあつたとか、反対に、家への來客が差出した手土産を包装紙からカステラと見抜いた私が、すばやく台所へ走つて菜切庖丁を持ってきたので、とんだ大恥をかいたとか。老母はいまでもそんなデテールを覚えていて、孫たちに披露したりしてゐるが、私は一向に思い當らない。大人と子供とは、生活上の関心がまるで違ふからであらうか。

そんなふうにおおむねは無自覺の灰色の幕に閉ざされてゐる幼時の薄闇を、突如として稲ひかりのように引き裂いて、一瞬の光景が現出することもある。例えば、こういうことがあつた。小学生の兄が、何か悪いことをして父に追いつめられ、縁側からはだして庭へ飛び降りて逃げて行く。夏の暮れ方で、兄がはだして踏んだ庭の土が夕立ちか打ち水かで、黒々と湿つていたことさえ私は思い出せる（ような氣がする）。そのシーンは、ただちに兄が裏の井戸端で足を洗